



図40 写真38の保護さくのところ。木陰が強くなり、また水がよどみ、どろ沼化してビャッコイは全滅し、ヌマゼリやクサヨシがまばらに生え、さくは朽ち木と化した。(1985.10.28)

のことかさっぱりわからず、なぜ不思議な植物なのかそのわけをたずねた。それに対して本田博士は、ビャッコイは牧野博士の発表以来、誰もそれを見た者がなく、どこに生えているのかもわからず、全く幻の植物であると思われていた。ところが昨年清水傳吉氏からの手紙にビャッコイの産地が福島県の金山であることが書いてあり、だいぶ前に同氏がそこで採集したという標本がビャッコイそのものようで、清水氏の言うことが本当らしく、それにしてもたいへん奇異なことであるという。私はそれを聞いて驚いた。ビャッコイは私や弟達まで子供のときからそれをよく知っていた。それが50年もの長い間、植物学界で幻の植物とされていたとは私も貞次郎も全く知らなかったことである。それで私はビャッコイについて詳しく話をしたら、ぜひその原産地を見たいと言われ、後日貞次郎が金山の瀬戸原と不動清水に本田博士を案内した。



図41 金山, 不動清水から100mほど下の流れに生えているビャッコイ。(1963.8.31)

甲子温泉からの帰りに、私は白河で貞次郎に逢い、本田博士とのビャッコイの話をした。ところが3年前に東京の国立科学博物館で大井次三郎博士と貞次郎の間でも同じような話がでたそうである。ビャッコイが金山にあるとのことで大井博士がたいへん驚き、かつ喜び、さっそく昭和28年(1953)9月、貞次郎の案内で金山へ行かれた。そのとき戸ノ口原へも行ってみたいとの申出があったそうだが、貞次郎はそこは自分も何回かさがしたが見つからず、行っても無駄であることを申し上げたら、戸ノ口原にビャッコイがないことは多くの人が認めている。しかし自分の眼でそれを確かめたいとのことだったので、御案内したということであった。

ビャッコイが長い間の幻の植物から現実のものとなったのは、以上のような私達父子と大井、本田両博士との出会いがきっかけである。ちょうどその頃、貞次郎は小林勝先生と福島県植物誌の出版に取り組んでいたの